

昭和五十七年 四月二十九日

第一百十六回

史跡めぐり

赤塚地区

越谷市郷土研究会

加藤 幸一

# 第116回 史跡めぐり

1. 日 時 4月29日(木) 昭和57年
2. 集 合 南越谷駅前  
午前8時30分 集合
3. 方 面 板橋区 赤塚地区
4. 往 路 南越谷 ~~武蔵野線~~ 北朝霞  
(9:04)  
朝霞台 ~~東武東上線~~ 下赤塚
5. コー ス 1 ページ を 見よ  
(12の徳丸ヶ原公園は除く)
6. 復 路 新高島平駅 ~~都営地下鉄~~ 巢鴨  
巢鴨 ~~国電~~ 日暮里  
日暮里 ~~国電~~ 北千住  
北千住 ~~京武伊勢崎線~~ 越谷
7. 会 費 1700円(交通費 他)  
但し 昼食は別

# 赤塚地区史跡探訪

加藤 幸一

## 史跡探訪コース

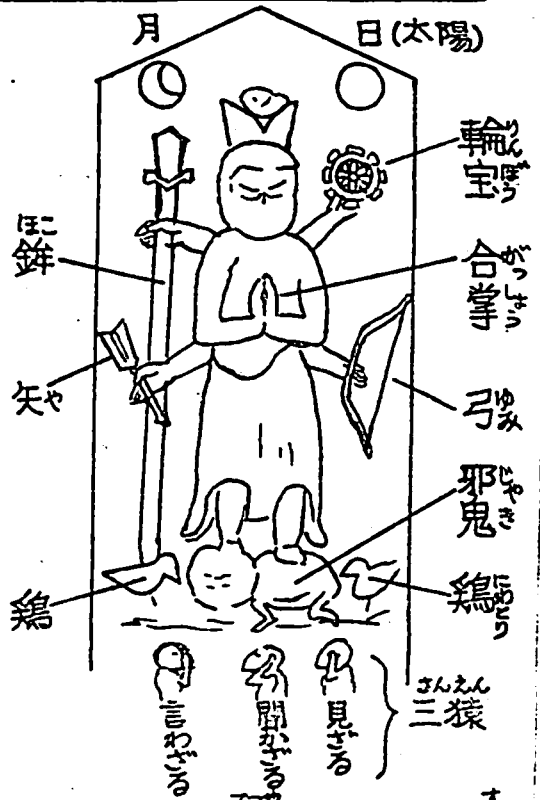
- 1 下赤塚駅— 2 下赤塚駅そばの庚申塔— 3 大堂の鐘— 4 松月院(高島秋帆の砲術記念碑・赤塚千葉氏初代干葉自胤の墓)— 5 乗蓮寺(東京大仏・赤塚城二ノ丸跡)— 6 不動の滝— 7 赤塚城本丸跡— 8 赤塚溜池公園— 9 板橋区立郷土資料館— 10 板橋区立美術館— 11 諏訪神社(田遊び)— 12 高島平団地— 徳丸ヶ原公園(高島秋帆の記念碑・こども動物園)— 高島平駅

### 1. 下赤塚駅そばの庚申塔

庚申信仰がさかんにおこなわれた江戸時代の頃の名残。この庚申塔は 夢のお告げにより再びこの地にもどされたと伝えられる

#### ア. 庚申信仰

人間の体の中に潜んでいる三尸虫と言われる三匹の尸虫が 60日に一度やってくる庚申(こうしん・かのえさる)の日の夜に 人の睡眠中に口から脱け出して天に昇り その人が日ごろおかしな罪過を天帝に報告する。すると その報告をもとに判断して 生命を奪ったり 若死にさせたりする。それゆえに 庚申の日の夜は 三尸虫が身体からぬけ出して天に昇る機会を与えないために 一晩中 眠らないように しないといけない。これが庚申信仰であり 庚申の夜 徹夜して眠らずに過ごす行事を 庚申待と称ぶ。



この庚申信仰は 中国の道教の教えの中にある三尸説がもとになっていた。

この三尸説は平安時代初期にはすでに日本の貴族社会の中にはいって  
いてこれが後に全国的に広まり 庶民の中にまで滲透してきて 日本独特の  
庚申信仰に発展していったものと考えられている。しかし明治にはいと排  
仏毀釈のあおりを受けたためか原因はよくわかっていないが 庚申信仰は急  
激におとろえた。

## イ. 庚申塔

1ページの図は下赤塚駅近くの交番のそばにある庚申塔で この塔の左右の  
両端に書かれている文字を読むと 宝暦四年甲戌歳（1754年）十二  
月に建てられたことがわかる。このような庚申塔は 庚申の日にみんな  
が一同に集まって庚申待をおこなった結衆記念として 時として建てられた  
ものである。庚申待供養塔ともいう。この庚申塔の型式は江戸時代の  
元禄（1688年～1703年）の頃に完成した型式。すなわち「日月・青面金  
剛・二鶏・三猿」の基本形が代表的である。つまり 中央に青面金剛像。  
上部の左右に日月（太陽と月）、下部に三猿（両手で目をおさえた見ざる、  
耳をおさえた聞かざる、口をおさえた言わざる の三猿）や 二鶏（二頭  
の鶏）の絵がつけられている。この頃が 庚申信仰の盛んな時期で 庚申塔建立の  
ブームが起きている。そして庚申様というと青面金剛をさすことが多くなる。  
なお 中央の青面金剛像は 怒りをこめた顔つきで 髪の毛が炎のように逆  
立ち、腕が6本もあって そのうち4本の手には 左右にそれぞれ、弓と矢  
、輪法（もと古代のインドにみられた武器で 車輪の形をしていて八方には  
こさきがでたもの）と金竿（形は槍に似て、長柄の先に両刃の剣を付けた武器）  
を持ち 中央の二本の手は 合掌（両方の手のひらを胸の前で立てて合わせ  
ること）、あるいは 右手に剣、左手に羅索（武器の一つで、綱のような物  
ないし女人の髪をつかまえてその女人をぶらさげている。そして青面金剛の足  
下には鬼を踏みつぶしている。

なお 庚申塔の中には他に 像形を略して「庚申」「庚申供養塔」などの文字  
のみを刻んだ文字庚申塔や 庚申様は実は天孫二吉ノミコトの道案内をした。

猿田彦なのだとして「猿田彦大神」などと刻んだ庚申塔など さまざまな庚申塔がある。

## 〔赤塚について〕

赤塚といえば昔は 何も入だてるものがない空によく風が舞い 徳丸ヶ原と呼ばれた荒川をひかえた広大な低地に「赤塚たんぼ」が広がって かつての穀倉地帯であったが 今ではその「赤塚たんぼ」は 都内(都区内)のマンモス団地「高島平団地」と変わった。一方、昔から開けて人々の住んでいた赤塚台地にも赤塚城(二)丸跡に 東京の新名所となってきた「東京大仏」があり、また 区立の美術館としては都内では唯一の板橋区立美術館も完成し 大きく変貌してきた。しかし当時の赤塚たんぼの名残として「田舎び」と呼ばれる地元の素朴な行事が 都の無形文化財 ついで 国の重要無形文化財に指定され 残されてきている。

なお この地区は 赤塚1丁目～8丁目、赤塚新町1丁目～3丁目などと住居表示変更がおこなわれたが 地元の人たちは 昔ながらの小学の地名を使ったりしている。この小字名を歌い込んだ明治から大正にかけての赤塚の郷土唄がある。『ヨカヨカあめうり歌』である。「ハア---イ---イ--- 下赤塚をば恋路にもじりヨー」で始まり 歌詞の中に小字名を男女の恋の進行きになぞらえて歌い込んでいる。全部で33小節あるが 最初の部分を次に紹介する。

「ハアー 花の『番匠免』を後にして 二人は互いに手をかりて  
ハアー 出でて行くのが『一丁目』よ だんだん下れば繕きわよ  
ハアー おなかが少し『下寺家』で おまんま食べよと出て行かば

## 2. 大堂の鐘 (江戸年間の古鐘)

江戸時代に有名だった阿彌陀仏の本尊と 名文の刻まれた釣鐘がある。

大堂は かつては 七堂伽藍(寺院としてあるべき堂などが すべてそろ

った寺の権え)をそなえた立派な寺であった。その名残と思われる上寺家  
・下寺家・大門などの小宮名が 周辺に残っている。しかし戦国時代の末  
(1561年)、越後の戦国大名 上杉謙信が 後北条氏の本拠地の小田原城を  
攻めるため 軍を進めて来たが この寺がその道中にあつたため 寺はすべ  
て焼き打ちされるといふ災難にあつた。その後おとろえ 現在のようにな

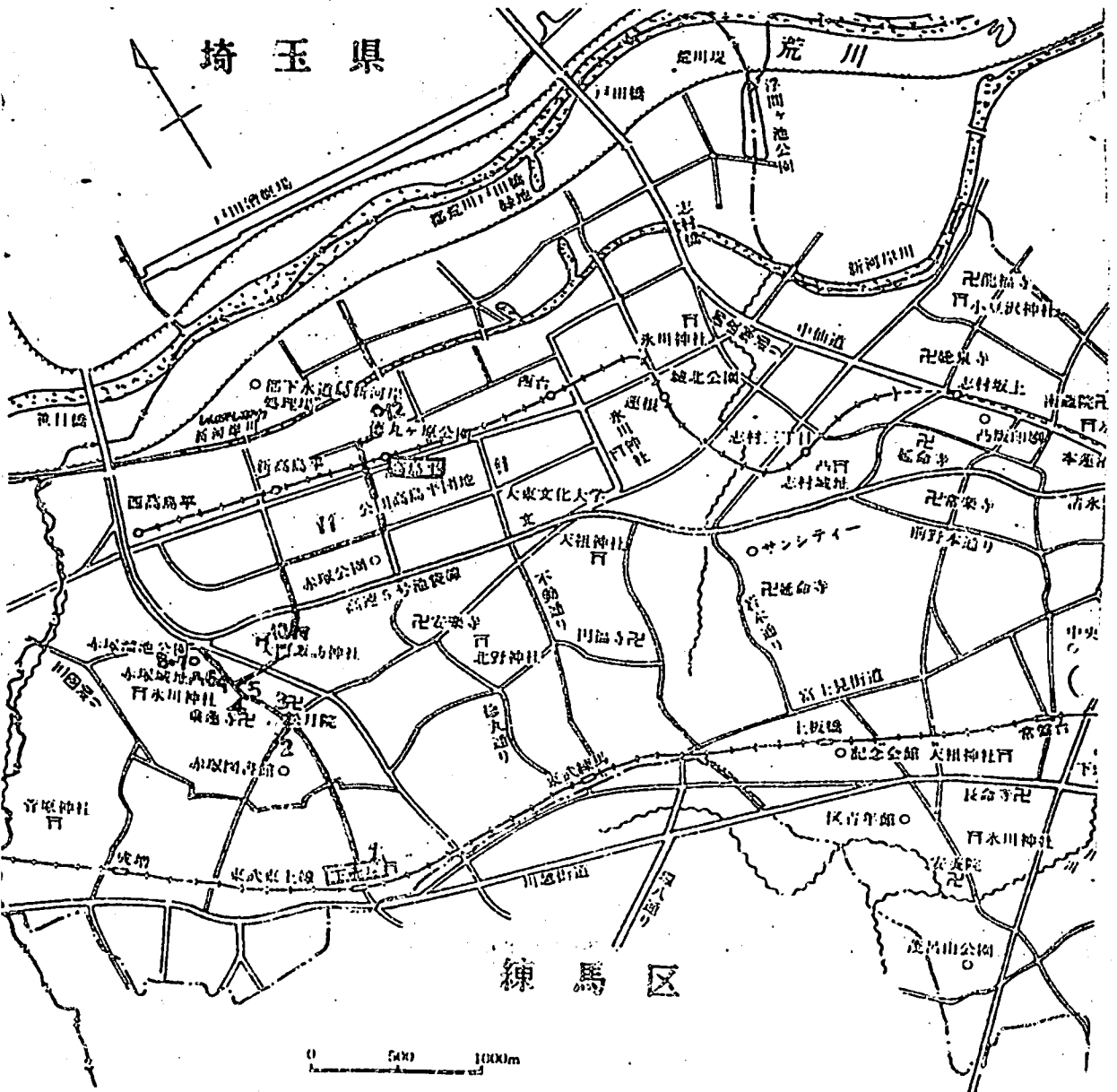


読売新聞(面54・2・26朝刊)より

横に縮小されたといわれる。

この寺の梵鐘は 南北朝初期の暦応3年(1340年)に作られたもの。

この鐘にきざまれている銘文(銘として刻まれた文)が 天下の名僧として知られた鎌倉建長寺の住職 中岩円月の文で そのため江戸時代になると、文人墨客(詩文・書画などにしたしむ人)の参詣者が 銘文の判読や拓本とり(凹刻された文字などを紙にうつしとること)のため 後をきらさなかったという。 国の重要美術品となっている。 現在、ここにかかっている梵鐘



(釣鐘)は模造品で本物は区立郷土資料館に展示されている。その銘文は次の通りである。

武蔵州豊嶋郡赤塚板橋寺阿寺鐘銘

鷲沈潜之幽鑿、破衆生之大夢、莫

先於鐘也、武州豊嶋彼阿寺者、前

朝全盛之時所建、具体古招提也、

独欠鑿鑿之器、可謂欠典矣、今快

賢阿闍梨、幹衆縁鑄巨鐘、厥志勤

矣、若夫豊嶺霜降、祇園月明、揚

音於大千沙界、伝益於未来無窮、

命中岩銘、銘曰、

武之豊郡 州之重鎮 崇崇福山

哀我彦俊 鹿氏范鏞 以落以歎

大扣大鳴 鯨吼鑿鑿 啓昏迪迷

遐邇感進 劫石有消 洪音無尽

曆応三年四月初八日

執筆三位親慶

大工平次五郎行次

勧進沙門治部阿闍梨快賢

△読み下し文▽

沈潜の幽鑿を鷲かし、衆生の大夢を破るは、鐘より  
も先なるはなし。武州豊嶋のかの阿寺は、前朝全盛  
の時建つるところ、体具する古招提なり。独り鑿鑿  
の器（鐘をかける器）を欠くは典を欠くというべし。  
今、快賢阿闍梨、衆縁を幹とし、巨鐘を鑄る。その志  
勤めり。もしそれ豊嶺霜降り、祇園（積舎の地）月明  
らかに、音を大千沙界に揚げ、益を未来無窮に伝え  
ん。中岩に命じて銘せしむ。銘にいわく、  
武の豊郡、州の重鎮、崇崇たる福山、わが彦俊を  
あつむ。鹿氏（鏞工）の范鏞（大鐘）、もって落しもつ  
て歎す（いけにえの血を塗る）。大いにうち、大いに鳴  
り、鯨吼・鑿鑿す。昏きを啓き、迷えるを迪き、遐  
邇（遠きも近きも）に感進す。劫石の消することある  
も、洪音は尽くることなし。  
（銘文と読解、石村喜英氏のご教示に負うところが大きい。）

「板橋区の歴史」(名著出版)より

阿彌陀堂に安置されている本尊（本堂の中央に安置され、最も重んじられる  
仏像）阿彌陀如来像は、鎌倉時代末期の寄木造りの作で、江戸時代には名作と  
して評判が高く、これを拝見し拝もうとする阿彌陀仏参りの参詣者も多かった。  
このようなはなやかだった大堂も、今では想像できないほどひっそりとたつて  
いる。土地の人の間には、この寺の創建は平安時代初期の大同年間（806年～  
809年）であり、本尊の阿彌陀像は聖徳太子の作だとの言い伝えがある。しか  
し文献（「武蔵風土記稿」）によると、後醍醐天皇のいた建武・延元年間の頃と  
されている。それでも区内では最古の寺院である。



なお この大堂のある高台は 実(まこと)は古墳(こふん) (古代の高く土盛(つちもり)した丘状(かみづか)の墓(はか))の  
上に建(た)っていて 八幡社(はちまんしゃ)の裏手(うらて)の大木(たいぼく)のあたりが その中心(ちゅうしん)であると考(かん)えられ  
ている。古墳(こふん)関係(かんけい)の出土品(しゅつどひん)は まだみつか(つか)っていない。

### 3. 松月院(しょうげついん) (曹洞宗(そうどうしゅう)・本尊(ほんそん)は釈迦如来(しやくかにょらい))

赤塚千葉氏(あかづかちばのうぢ)初代(よりのち)千葉自胤(ちばのうぢ)の墓(はか)と 江戸後期(こうご)の頃(ころ)に高島秋帆(たかしましゅうはん)がこの近(き)く  
の徳丸ヶ原(とくまるがはら)でこ(こ)な(な)った砲術(ひょうじゆつ)記念碑(きねんい)がある。

#### ア. 松月院と赤塚千葉氏

関東管領(かんとうかんりやう) (鎌倉公方(くぼくこうほう)足利氏(あしかがうぢ)の補佐役(ほさやく) 上杉氏(うえすぎうぢ)と 古河公方(こがこうほう)足利氏(あしかがうぢ) (鎌倉公  
方(こうほう)足利持氏(あしかがもちうぢ)は家来(けらい)である関東管領(かんとうかんりやう)上杉氏(うえすぎうぢ)に属(ぞく)ぼされたが 後(のち)に持氏(もちうぢ)の子(こ)成  
氏(なりうぢ)は 古河(こが)において古河公方(こがこうほう)となる)とが関東(かんとう)を二分(にぶん)して対立(たいりつ)していた頃(ころ)  
下総(しもさげ) (今の千葉県(ちばけん))の豪族(ごうしゆ)千葉一族(ちばいっしゆ)と双方(ふたうぢ)に分(わか)れていた。千葉自胤(ちばのうぢ)は古河  
公方(こうほう)に千葉城(ちばじやう) (今の千葉市(ちばし))・市川城(いちがわじやう) (今の市川市(いちがわし))と追(お)われ 扇谷上杉氏(あおぎやううえすぎうぢ)  
の家宰(かさい) (補佐役(ほさやく)) 太田道灌(おおだみちかん)に守(まも)られて康正2年(こうせい2ねん) (室町時代(むろまちじだい)中(ちゆう)ごろ 1456年)  
に 武蔵(むさし)のこの赤塚城(あかづかじやう)に移(うつ)り 赤塚城(あかづかじやう)を本拠地(ほんきょち)とした。その後(のち) 太田道灌(おおだみちかん)  
と協力(きやうりき)して 豊島(としまし)の近(き)くに勢力(せいりき)を張(は)っていた石神井城(いしのかみじやう)を攻(せ)め落(お)とす  
などして勢力(せいりき)を伸(の)ばしていった。そして明心元年(めいしんげん) (1492年) すぐ近(き)くにあ  
った寺院(じゆん) (真言宗(しんごんしゅう) 宝持寺(ほうぢじ)) に寺領(じりやう)を与(たま)へ 寺名(じやう)を松月院(しょうげついん)と改(か)めた。これ以  
後(のち) この寺(じ)は 赤塚千葉氏(あかづかちばのうぢ)の菩提寺(ぼだいじ) (先祖(せんぞ)代代(たいたい)の位牌(いはい)を納(な)めてある寺(じ))と  
な(な)った。墓地(ぼだい)に 千葉自胤(ちばのうぢ)とその夫人(ふじん)比丘尼了雲(ひきうにりょううん)の墓(はか)がある。本堂(ほんだう)の屋根(やぐら)  
に見(み)られる家紋(かもん)は 千葉氏(ちばうぢ) 本家(ほんけ)の月屋紋(つきやし)である。なお 自胤(うぢ)と思(おも)われる墓(はか)  
について異説(いせつ)がある。この墓(はか)には 永正3年(えいせい3ねん) (1506年)の没年(ぼつねん)と玄参(げんさん)とい  
う名(な)がみられ 松月院(しょうげついん)にある位牌(いはい)にも 千葉七郎法号元三(ちばしちろうぼうごうげんさん)とな(な)っている。  
玄参(げんさん)とは 千葉自秀(ちばのひでひら)をさすのであるから 永正3年(えいせい3ねん)は自秀(ひでひら)の没年(ぼつねん)で この  
墓(はか)はつまり自秀(ひでひら)の墓(はか)であるとい(い)うのである。それゆ(ゆ)え松月院(しょうげついん)の開墓(かいぼ)は 千  
葉自胤(ちばのうぢ)でなく 千葉自秀(ちばのひでひら)の方(かた)であり、自胤(うぢ)の死(し)は明心2年(めいしん2ねん) (1493年)のほ  
すであるとしている。

### 鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏

鎌倉府(関東府)は 關八州と伊豆・甲斐の関東10ヶ国を統轄している室町幕府の一種の出先機関である。その組織は幕府の機構にならい簡注所などの機関をもち 行政・司法・軍事などの面で中央幕府と一応独立していた。その鎌倉府の長官が 鎌倉公方(鎌倉御所・関東公方)といい、その補佐役が 関東管領(鎌倉管領)と呼び 歴代上杉氏がその職についた。のち鎌倉府は 自立性が強まり 中央幕府と対立する。また関東管領とも対立する。

永享10年(1438年)、鎌倉公方足利持氏と関東管領上杉憲実(足利学校を再興した人)とが対立し 戦火が切られた(永享の乱)。この時 中央幕府は 管領側についている。この結果 持氏は自殺し 鎌倉府は滅びる

### 古河公方足利氏と関東管領上杉氏の対立

関東管領上杉氏は永享の乱、結城合戦(足利持氏の遺児、安王・春王らが 結城城にたてこもり幕府と上杉憲実の専権に対し反旗をひるがえした事件)によって関東における実権をにぎった。文安6年(1449年)に持氏の子成氏を京都から鎌倉公方としてむかえたが 成氏は 享徳3年(1454年)に 関東管領の上杉憲忠(憲実の子)を殺し、下総(千葉県)の古河に移って古河公方と称し、上杉氏と対立した。なお、太田道灌が 扇谷上杉氏の家宰となったのは 康正元年(1455年) 25歳の時である。

### イ. 松月院と高島秋帆

江戸時代の天保12年(1841年)、高島秋帆が幕命により 徳丸ヶ原(現在の高島平)で洋式砲術の演習を行なった時、この寺が 本陣(大名や幕府役人などが泊まる宿)に指定され、高島秋帆らの宿泊所として使用されたことから ここを陸軍発祥地とされてきた。本堂の前に 大砲を型どった「火技中興洋兵開祖の碑」の顕彰碑(隠れた功績などを明らかにして一般に知らせるための碑)が 建っている。

ウ. 松月院と下村湖人 下村湖人は赤塚地域の風物に魅せられ『次郎物語』執筆中も絶えずこの地域を探訪し 作品の中にもこのあたりの情景を描写し 一部は 松月院で執筆したともいわれている。このような縁から この寺に 下村湖人の墓がある。墓は 墓地の北端に近い中央道の左奥にある。

## ◀『赤塚』の地名のおこりと古墳▶

松月院山門前の赤塚村自治記念碑のあるあたりは古墳のあった跡といひ、地元の人はこの古墳を「荒れ塚」といって禁忌(さわりあるもの、忌むべきものとして忌み嫌われ禁ずること)の地としていた。これがなまって『赤塚』の地名になったといわれている。

明治21年に周辺6ヶ村が合併して赤塚村となり、明治25年に赤塚村役場(現在の松月院門前の児童公園)ができた折、この古墳が取り壊されて、そこに赤塚村自治記念碑がたつたのである。ここに生い繁っていた古塚からヒントをえて、明治中期の落語界の名人三遊亭円朝が名作「怪談乳房塚」を書き上げたという。

## 4. 乗蓮寺の東京大仏と赤塚城二ノ丸跡

赤塚城二ノ丸跡に日本で三番目に大きい東京大仏が完成

乗蓮寺はもと旧板橋宿にあつたが道路拡幅などで昭和48年、赤塚のこの高台に移転してきた。ここは赤塚城二ノ丸跡であつたと考えられている。ここに昭和52年4月、奈良・鎌倉の大仏に次いで三番目に大きいという阿彌陀如来の「東京大仏」が開眼(仏像が完成すること)した。大仏の像高は8m、総高13mである。この大仏は赤塚城に残る無名の戦死者の霊を慰めようとして建立されたもの。

なお、この寺は板橋区内きつての名刹(古くからの由緒ある寺)で、徳川八代将軍吉宗の時から将軍家のお鷹狩りの休憩所となり、のちに御膳所(台所という意味で、将軍家の調理場・台所)に指定された。

## ◀赤塚城二ノ丸跡▶(説明板より)

赤塚城は、山すそに荒川とその支流をめぐらせた半島状の台地を利用した中世の代表的な平山城であつた。火砲伝来以前の城は後世にみる櫓や石垣を作らず、館といつた方があつている。

この丘は二ノ丸跡といわれ、北方の丘が本丸跡といわれる。ここに祀られている小相は赤塚城の守護神として千葉氏に崇められ、妙見神である。

千葉氏は平氏の正統で皇胤のため、民の神をもたず北斗七星の主星「北辰」、  
 仏教でいう妙見菩薩を守護神とした。本丸跡に連なる平地一帯は徳丸ヶ原  
 といわれた。昭和五十四年三月 板橋区教育委員会

① 中世 --- 鎌倉から室町時代まで

② 平山城 --- 平地にある丘を利用して造った城。

③ 火砲伝来 --- 種子島の鉄砲伝来のこと

④ 櫓 --- 城の中にあつて見渡したり矢を射たりするために作つた高い建物

⑤ 館 --- 貴族や豪族などの屋敷。

⑥ 小祠 --- 小さな祠(神を祀つた小さいお社)

⑦ 妙見祠 --- 妙見菩薩を祀つた祠。妙見菩薩とは北辰(北極星)を神格  
 化した菩薩、北辰菩薩ともいう。国土を守り災難を除去し敵を退  
 散させ寿命をのばすといわれる。ある時、千葉氏は戦陣で危機に  
 おちいった時、月に祈つて九死に一生を得たという。これより熱心  
 な月星信仰者。すなわち妙見信仰者となった。千葉氏はその居住地に  
 勝利を祈つて必ず妙見菩薩を勧請(神仏の霊を移し祭ること)している。

⑧ 皇胤 --- 天皇の子孫

⑨ 北辰 --- 北極星をさす。

## 5. 赤塚不動の滝

大山詣・富士詣の出発に身を清めるために利用された滝

この不動の滝のそばにある説明板には 次のように説明されている。

江戸時代のなかごろから流行した大山詣り(夏、相模国の大山上に 白衣・  
 振鈴の姿で「大瀬城」と書いた木大刀を携つて参詣し、帰りに先年納めた  
 木大刀と取りかえ、持ちかえる)・富士詣り(富士講を作り、陰曆6月1日  
 から21日までの間、白衣を着て、鈴と金剛杖を持ち、呪文などをとなえな  
 がら富士山を登山し、山頂の富士権現社に参詣すること)の道者(うち連れ  
 て参詣する旅人)が滝水にうたれ、心身をきよめ参詣に出発した(罪や

けかれをはらうために、川や滝などで水を浴びて身を清めること)場の遺跡である。崖上に二体の不動尊(目を瞑らし、牙をむき出し、左手には錘を、右手には剣を、そして背には大火災を背負っているのが一般的)石像をまつ。昔は滝つぼの前に垢離堂(神仏に祈願する際、水を浴びて心身を清め、一切の雑念を払って精神の集中をはかる建て物)が設けられていたといわれる。昭和八年滝つぼが整理される前には、現在より水量も多く水の落ち口も広範囲にわたっていたものと考えられる。この滝水はいかなる旱魃の年にもかれることなく、数少ない区内滝水の代表的な遺跡である。

滝の前の道は、通称鎌倉街道といわれ、永禄四年(1561)上杉謙信が小田原城を攻めるための軍勢を進めた道であると伝えられている。

昭和五十四年三月 板橋区教育委員会

(注意)上の文中で( )内の文は 筆者が 付け加えた説明文。

## 6. 赤塚城 本丸跡

千葉自胤の入城から 秀吉の全国統一まで 赤塚千葉氏の赤塚城本丸となっていた。

説明板によると 次の通りである。

景正二年(1456)、古河公方足利成氏の軍に追われた千葉実胤、自胤は市川城をのがれ、太田道灌の助けで兄実胤は石浜城へ、弟自胤は赤塚城主となった。これ以後武蔵千葉氏として勢力をばり、石神井城の豊島氏を滅ぼし、さらに文明十一年(1480)には下総の臼井城を掌中におさめ、天正十八年(1590)廃城となるまで約百四十年間武蔵、上総、下総に覇をとなえる拠点となった。

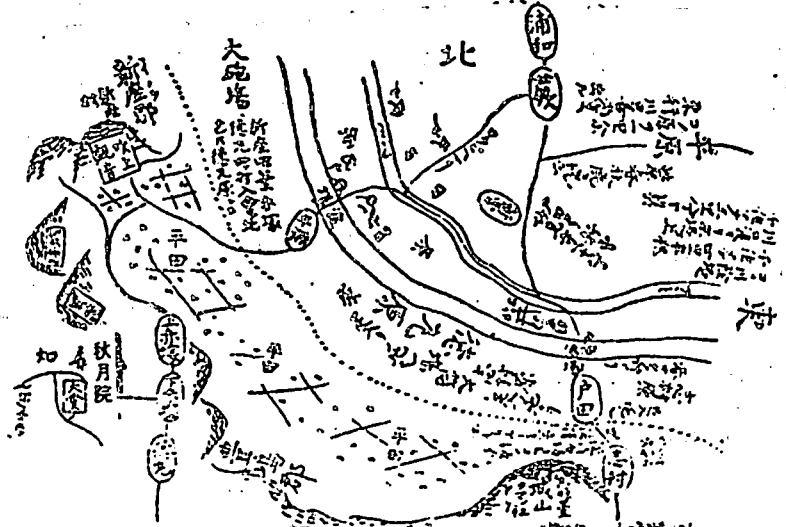
本丸跡は俗に「お林山」と呼ばれ、山の裾まわりは荒川の水が浸し、自然の要害の上に建てられた中世の代表的平山城であった。

昭和五十四年三月 板橋区教育委員会

## 《赤塚城の推移》

鎌倉時代の頃は 藤原赤塚氏の居所が 室町中期から 後北条氏の小田原城落城と秀吉の全国統一まで赤塚千葉氏の赤塚城本丸があった所である。

すなわち 平安時代の末期、藤原赤塚氏が入城したが 建武2年(1335年) 志村氏と共に新田義貞に味方して 足利尊氏に敗れた。その後、足利氏の一族で 戸田、麻城主の渋川氏に100年余り支配された。その後、康正2年(1456年)、太田道灌の配下として 千葉自胤が入城したが 天正18年(1590年) 秀吉の配下 石田三成によって赤塚千葉氏は亡ぼされた。



赤塚氏が建武2年迄赤塚城に住し、その菩提寺は秋月院であるという。上記の図の秋月院は現松月院と同一の地と思われる。(武蔵野歴史地理)

## 《赤塚城本丸跡登り道》(説明板より)

平安朝以来、千葉城に権勢し 房総一円に勢力を張っていた 平家の正統千葉氏も鎌倉管領家と下総古河城に拠る足利成氏の抗争の犠牲となり 本城千葉城を追われ 最後の砦と頼む市川城と康正二年(1456)一月十九日落城、千葉自胤は武州赤塚 即ちこの城を足かりに 城北地方から下総方面まで手中に入れ、天正十八年までの武州千葉氏繁栄の本拠とした。ここから北へ登れば本丸跡、旧道を入浴てた葉蓮寺の丘が二の丸。この丘を尺切って走る旧道が城の「はぎま道」と伝えられている。

昭和五十二年三月 板橋区教育委員会

## 7. 赤塚溜池公園

赤塚溜池は赤塚城の天然の水溜跡である。

赤塚城本丸の丘の裾のまわりから谷にかけてはかつては荒川の水が、はいり込んでいて、要害の地となり一面に水に浸されていた。そのなごりが、本丸跡の北側の雑木林の斜面を下るとすぐにぶつかる池である。赤塚溜池である。これは、荒川の水がここままではいり込んだ天然の水溜跡が、今日まで残ってきたものである。この溜池は明治になって徳丸ヶ原(今の高島平団地あたり)に赤塚たんぼが開かれると赤塚たんぼのかんがい用溜池となった。現在ではこの溜池は郷土資料館あたりなど水埋めたてられ規模が小さくなったが、魚がいる池として釣りに親しまれている。

なお赤塚城の空堀の面影が狭間道(本丸と二ノ丸とにはさまれた道)から本丸に登る道の途中の笹の繁みの深い所や本丸跡の北側にあたる部分とにかすかに残っている。

## 8. 板橋区立郷土資料館

武蔵野の面影を残す雑木林に囲まれて建てられていて、本館、民俗館、納屋に分かれている。本館には原始時代の縄文式土器・弥生式土器や中世(鎌倉・室町時代)の板碑、近世(安土桃山・江戸時代)の板橋宿関係の資料、西島秋帆関係の古文書などが展示されている。民俗館は約二百年前に建てられた民家を移築復元したもので、かつての農村の生活用品・農機具などを次々に展示されている。昭和47年の開館である。

## 9. 板橋区立美術館

昭和54年5月20日(日)に区立の美術館としては最初の美術館として開館した。

この中に郷土資料コーナーが設けられていて板橋区の郷土がよくわかるようにいろいろと展示されている。

# 10. 諏訪神社

諏訪神社には 一年間の農耕行事をおもしろおかしく演じた古式ゆかしい「田遊び」の行事が 残っている。

諏訪神社は、赤塚城主の千葉胤胤が建てたもので 古くから戦いの神様として 戦国武将の信仰が厚かった信州諏訪大社の分霊を この地に移して祭り、赤塚城の鬼門除け(鬼門の方角、すなわち北東側に神仏などを祭って災難を除けること)としたと伝えられる。ご神木として社殿の左右に巨大な銀杏の木があるが、これは俗に「めおといちょう」と呼ばれ、夫婦和合・子孫繁栄などの庶民の信仰のよりどころともなっている。本殿の向って右が雄銀杏、左が雌銀杏である。

当社は 古式ゆかしい神事である「田遊び」が古くから伝わり 近くの徳丸の北野神社の「田遊び」とともに 都の無形文化財となっている。この「田遊び」とは 平安時代から鎌倉時代にかけて全国的に流行した「田楽舞」が各地の風俗習慣に溶けこんで 各様の姿で伝承されたものである。当社の「田遊び」は 毎年2月13日の夜 行なわれる。すなわち 農民がみのりをつかさどる女神をお招きし 神前で 農家における一年間の農耕行事を神前に置かれた太鼓を田に見たてて 唱え ことばと踊りとで 田植えから収穫・倉入れまで 順を辿って おもしろおかしく演じる。この時、巨大な男根をあらわした「よねぼう」も使われる。このようにして 神を楽しませて 豊作と子孫繁栄とを祈った。なお、ここで口ずさむ唱え言葉は 口伝で伝えられてきたためか、奈良平安から江戸までの古語が入り混じっているようで、ことばの意味を解釈することは困難であるという。



ニリンソウ(北陸第一級 野新植物園監一より)

は秋のいなかころにニリンソウが咲くまで、都市化ですっかり減ったのを、園地を占めて取り戻そうと頑張りました(公園緑地課)という。

「田遊び」のたわらに雄銀杏があつて、ニリンソウの小さな花が、木もれ目にかかっている。板橋区大田、諏訪神社のニリンソウ群生地が、地元自然観察会と、都北部公園緑地事務所の協力で、保護されることになった。銀杏の花ではないが、邪心には珍しい併発だけに、関係者はホッとした表情だ。ニリンソウは、キンポウゲ科の多年草。四月から五月にかけて高さ十センチの茎に、直径二センチくらいの白く花を二個つける。花の香りがすももく、葉も自立たなくなり、夏から冬にかけては枯れたまま、花の葉節以外は、それと知られぬのもほんごころない。板橋区では、昨年十月、ニリンソウを「戻の花」に指定した。「かつて



## 田遊び

春に先立ち、その年の五穀豊穡と子孫繁栄を祈願して、神に奉納する、予祝行事の一種である。板橋区内では、徳丸北野神社と赤塚諏訪神社に、原型をほとんどそこなうことなく伝承されており、かつては未明まで夜を徹して行われていた。

その起源は明らかでないが、平安・鎌倉時代より行われている古い祭りのひとつで、農家の一年間の行事を、唱えことばと所作により面白おかしく演じて神に豊作を祈願するものである。

行事は、境内に設けられた「もがり」という壘域を舞台として行われる。徳丸では、2間（約3.6メートル）四方に竹をたて、しめ縄を張り、赤塚では、丸太を組んで三方を囲った縄をこしらえ飾り物をつける。この「もがり」の中で行事に奉仕する人を役人といい、音頭をとる大稲本、介添役の小稲本、鍬取り、早乙女などの諸役がある。

祭りの中で唱和される唱えことばは、口伝によって昔から伝えられてきた。さまざまな要素から成り立っていると思われ、「田遊び」の起源をたどる手がかりともなるものである。



(酒粕氏のスケッチより)

「田遊び」は、古くから受け継がれてきた祭りであるため、江戸時代の文献の中にもその記載を見ることができる。文政11(1828)年に完成した幕府編纂の地誌『新編武蔵風土記稿』の「十羅刹諏訪神社」の項には「例年正月十三日の夜田遊の祭礼と号し、村民樂り詩入れより刈取まで農業四時のささを次第になし、いと古雅の祭なり」と、赤塚の「田遊び」についての記載がみえる。このほか、『遊歴雜記』、『四神地名録』、『武蔵野話』、『江戸名所図会』といった総行文のようなものにも取り上げられており、往時の祭りのようすをしのぶことができる。

昭和4(1929)年、『民俗芸術』誌同年9月号に、赤塚の「田遊び」についての詳細な調査記録が発表され、民俗学や芸能史の研究分野としても注目されるようになった。その後、板橋区の「田遊び」は、昭和28(1953)年には東京都の無形文化財に指定され、同51年には国の重要無形民俗文化財としての指定をうけた。

現在、北野神社では2月11日、諏訪神社では2月13日に執行されている。このほか、赤塚水川神社でもかつては同じような形態で執行されていたと思われるが、現在はかなり省略された形で2月10日に行われている。

S56.11.29 ~ 57.2.14  
の間、板橋区立美術館の郷土資料コーナーの特別展「いたばしの郷土芸能」のパンフレットより

# 11. 高島平団地

高島平の「高島」は高島秋帆の名からとったもの。都区内最大のマンモス団地で自殺の名所としても知られてしまった。

昭和40年、かつての徳丸ヶ原、当時の赤塚たんぼにマンモス団地の建設が決定し、高島平団地の建設が始まったのは昭和41年の暮れである。今や10階〜14階の高層住宅は64棟も林立し、高島平1〜9丁目にわたって1万7000世帯、人口4万9000人(昭和52年6月現在)の都区内最大のマンモス団地ができあがった。なお、ここには公立高校1校、中学校3校、小学校6校がみられる。

## 《高島平団地と自殺》

(場所は、丁目・番地・号線の順でかかれてる)

年月日	性別	年齢	職業	住所	学年	身長	性別	職業	住所	学年
1. 67. 6. 27	女	34	無職	加区	2-25-3	18	女	4.8	49	北區
2. 48. 1. 23	男	31	無職	加区	2-25-3	17	男	4.13	38	加市
3. 49. 1. 23	男	31	無職	加区	2-25-3	18	男	4.13	9	小学生(真男)
4. 49. 2. 19	女	35	無職	加区	3-11-1	18	女	4.13	9	小学生(真男)
5. 49. 3. 10	女	36	無職	加区	3-11-1	20	女	6.5	53	無職
6. 49. 3. 17	女	48	無職	加区	2-20-3	21	女	7.29	24	無職
7. 49. 4. 25	男	69	印刷工	加区	2-25-3	22	女	17.0	47	無職
8. 49. 5. 20	男	69	無職	加区	3-12-6	23	男	12.5	38	無職
9. 49. 6. 21	男	40	無職	立区	2-23-7	24	男	1.9	41	会社員
10. 49. 12. 28	女	30	会社員	立区	2-23-2	25	女	1.13	28	無職
11. 49. 1. 5	女	30	会社員	立区	3-11-3	26	女	1.15	17	高校生
12. 49. 9. 29	女	23	大学生	立区	2-20-3	27	男	1.26	20	大学生
13. 50. 8. 18	女	31	無職	立区	2-23-5	28	女	4.19	20	大学生
14. 52. 1. 12	女	25	無職	立区	2-23-7	29	女	6.0	40?	<身元不明>
15. 52. 3. 11	女	14	小学生	立区	2-23-7	30	女	6.18	22	無職
					2-23-2	31	男	6.23	29	無職
					3-14-1	32	女	7.3	35?	<身元不明>

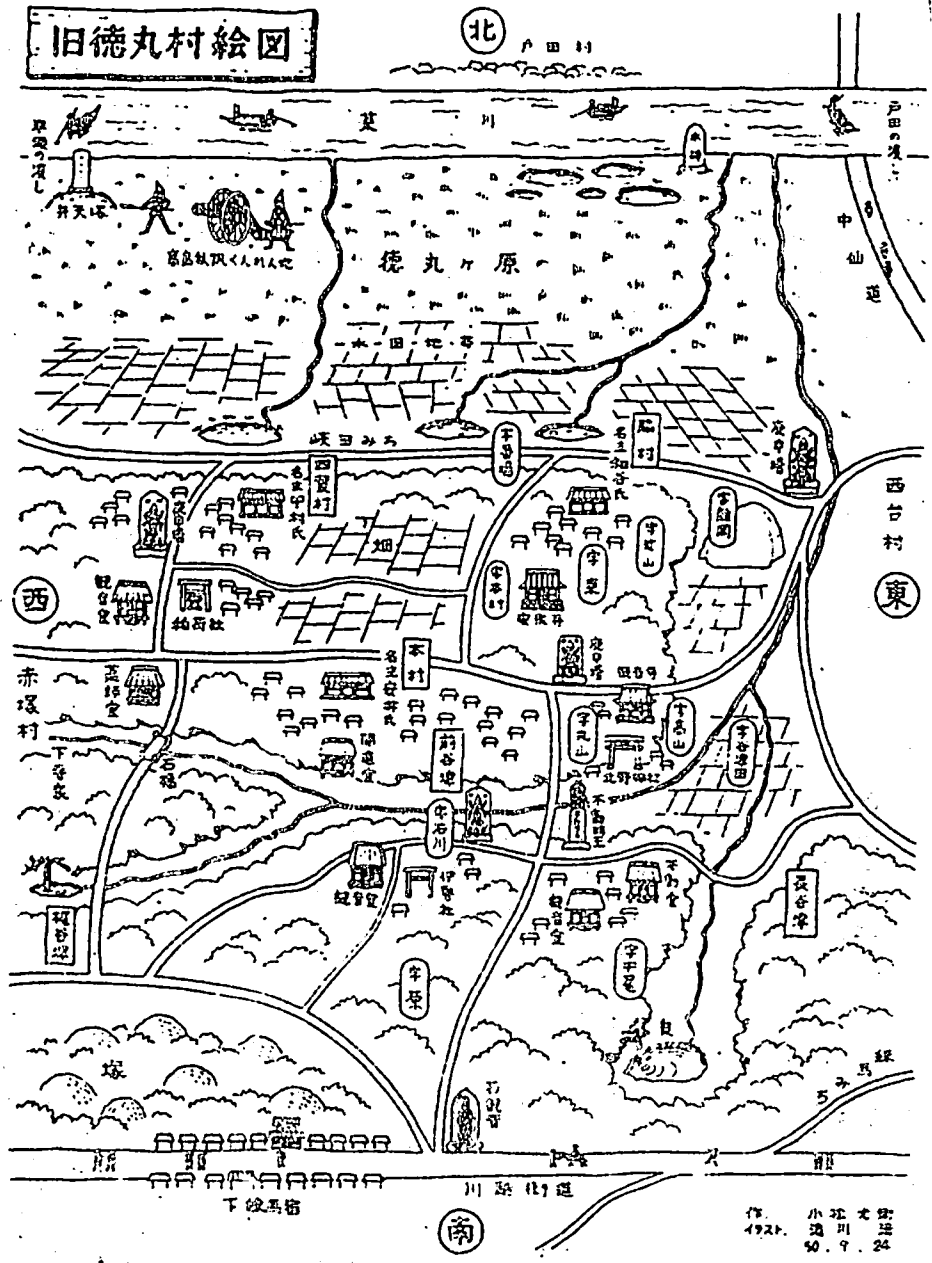
高島平団地では自殺者によるまきぞい事故が心配され、これ以上の自殺者をなくそうと屋上にあがる通路の扉には鍵がかけられ屋上に上がれないようになっている。

なお、昭和55年8月10日現在で昭和47年の高島平団地入居開始以来飛び降り自殺による犠牲者は74人となった。

# 12. 徳丸ヶ原公園

高島平は江戸時代「徳丸ヶ原」と呼ばれ高島秋帆が洋式砲術の演習をおこなった所。明治にはたんぼがたまり「赤塚たんぼ」となる。現在、高島平団地が立ち並ぶ広大な地域は荒川の沖積地(流水のため土砂

# 旧徳丸村絵図



武州板橋誌より

旧徳丸村絵図

などが積み重なってできた土地)で 低地であって 江戸時代には 徳丸ヶ原 と呼ばれ 一面がほとんど草原で ところどころ湿地があり 荒川の洪水によって常に水に浸されていた。そのため この地域は 付近の村々のまぐら場 (牛馬の飼料にする草を刈り取る場所)として利用され、時により將軍さまが狩りに来たりする程度であった。このような場所で 高嶋秋帆は幕府の命

により 洋式砲術の演習をおこなったのである。その後、明治2年(1869)になると、この地は民間に払い下げられ、開墾されて水田となり、「赤塚たんぼ」とか「徳丸たんぼ」とか呼ばれる穀倉地帯に変わった。

### 《徳丸ヶ原と高嶋秋帆》

徳丸ヶ原公園内にある説明板には 次のように説明されている。

#### 都旧跡 徳丸ヶ原

所在 板橋区徳丸町、徳丸本町、下赤塚町、四ツ葉町、西台町

指定 大正九年三月

徳川時代の天保年間(1830~1844)に入ること、外国船はしばしば日本近海に現われ、わが国の情眼を破った。1840年 中国ではアヘン戦争が起り、高嶋秋帆は 洋式砲術の採用を幕府に建議(意見を上役に申し述べること)した。翌天保12年(1841) 秋帆は幕府の招きに応じ 門下生らを指揮して、この徳丸ヶ原に洋式の訓練(兵士を訓練すること)と 火砲の実弾射撃を行ない、戦闘力を遺憾なく発揮し、幕府の高官を驚かせた。翌年 幕府は彼をして砲術教育を行なわせる一方、異国船打払令(この頃、ロシア・イギリスなどの外国船が日本の近海への来航が増加してきた。それか海防策をもたない幕府はフェートン号事件などにおどろき、この中で、1825年に外国船は見つけだし打ち払えと出した法令)を改め 薪水(薪と米、すなわち炊事のこと)給与を許すようになった。(事件は外国船の飛来とこの洋式砲術演習で知ったのである)

徳丸ヶ原は明治以降 開墾が進み 大きく変貌しているが 現在この弁天塚(現在、高嶋平6丁目のトラックターミナルの入口付近にあったが、昭和45年に住宅公園の区画整理にともなって この塚は取りくずされ今はない。なおこの時、この説明板も取り払われ、現所在地の徳丸ヶ原公園内に移された。)は 高嶋秋帆がみずから指揮に立った地点であると伝えられている。

昭和四十三年 三月一日 建設

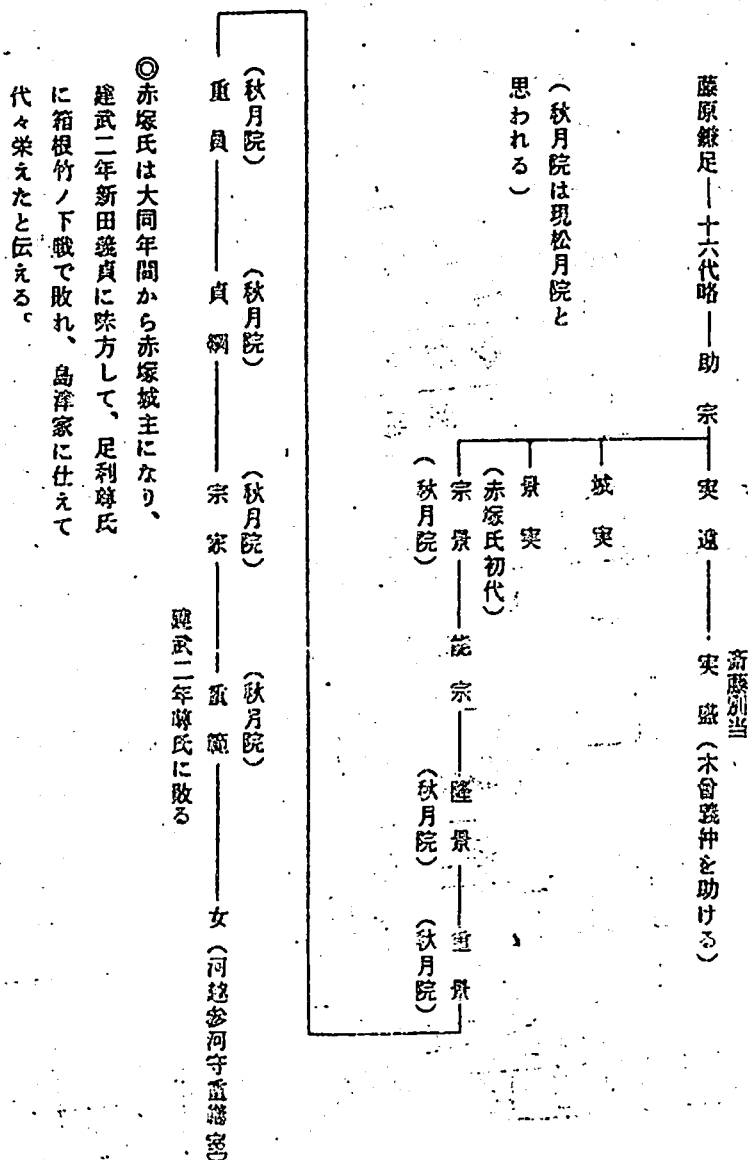
東京都 教育委員会

なお この公園内に「徳丸遺蹟碑」がある。もと 弁天塚にあったものである。碑文は 次の通り。

此より北 荒川に至る南北一千米突 東西約二千米突の地域は 右の所謂 徳丸原なり。天保十二年五月、高嶋四郎大夫先生が幕府の命を受けて、門人百余人を指揮し、始めて洋式の歩兵隊操練等を行ひし処とす。

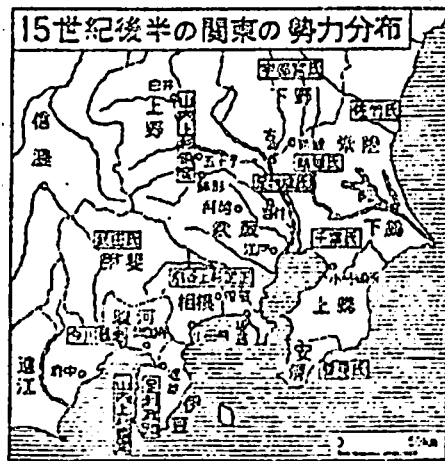
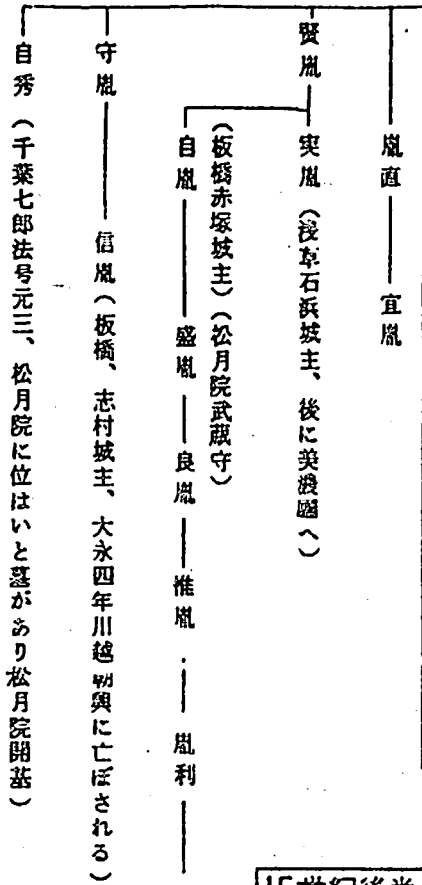
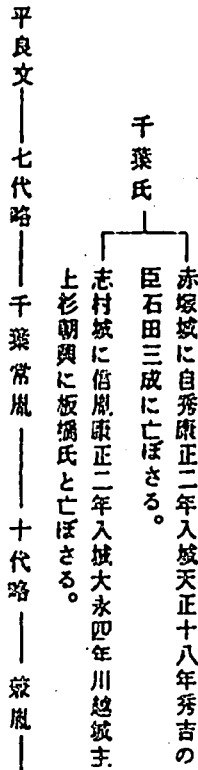
大正十一年六月 建設首唱者

板橋の赤塚城の赤塚氏系図 (建武二年迄赤塚城に居た)



千葉氏系図

(鎌倉大草紙や新編武蔵風土記稿に赤塚城に入ったのは千葉自胤とあるが、松月院の墓も、位はいも自秀とある。自胤の死は明応二年で、自秀は永正三年に死んだ……?)



使用した主な本

- ・「庚申塔」(練馬区教育委員会)
- ・「庚申塔」(板橋区教育委員会)
- ・「庚申信仰」(角川書店 平野実 著)
- ・「読売新聞」(S54・2・26 朝刊 江東版)
- ・「板橋区の歴史」(名著出版)
- ・「いたばし風土記」(板橋区教育委員会)
- ・「武州板橋誌」(板橋史談会 著)